

東海大学付属図書館第62回展示会

武士展



2016年11月14日-12月17日

開館 9時-17時 (土曜日9時-16時 / 日曜閉室)

東海大学 湘南校舎 付属図書館展示室 (11号館1階)

～ 最近の展示 ～

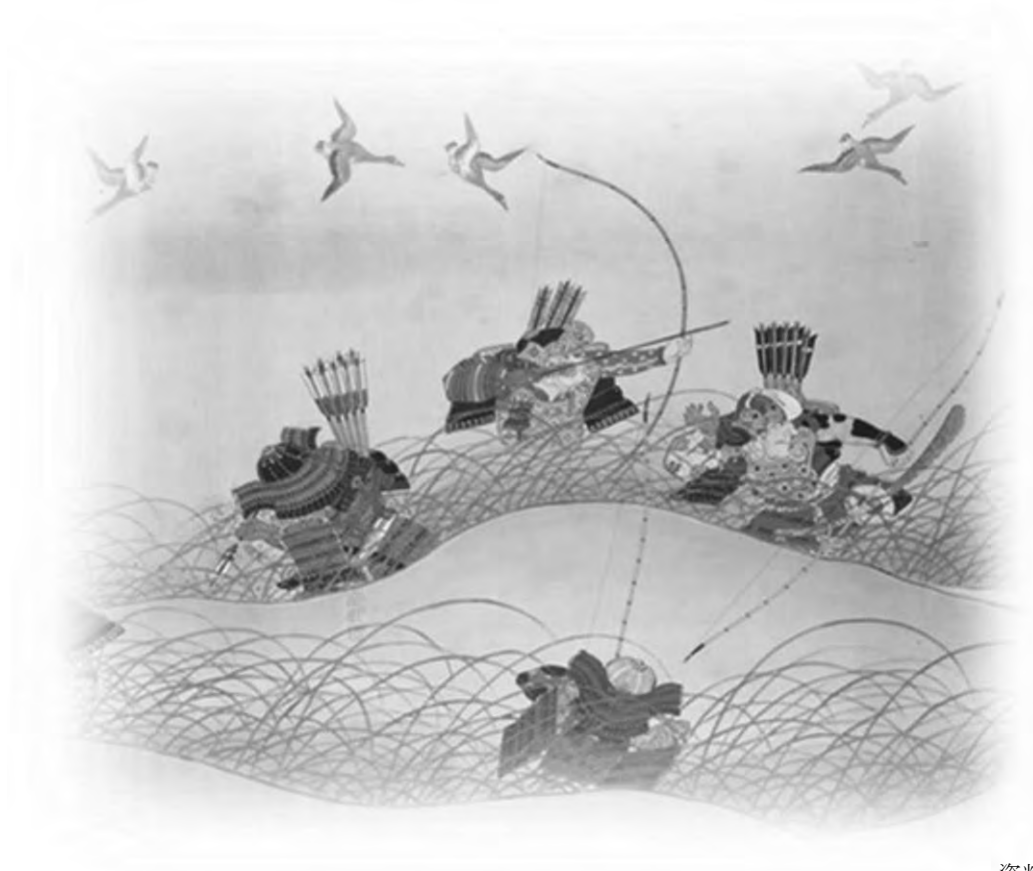
- | | | |
|-------|-----|-----------------------------|
| 2011年 | 11月 | 悠久のナイルと人々～鈴木八司古代エジプトコレクション展 |
| 2012年 | 5月 | 國文學の傳燈 写す・読む・伝える－桃園文庫の世界－ |
| 2013年 | 6月 | 語り継がれる書物たち |
| 2014年 | 7月 | 科学と技術の古典 |
| | 11月 | 書物に棲む動物たち |
| 2015年 | 5月 | 幕末・明治を生きた人々 |
| | 12月 | 桃園文庫展－池田亀鑑の仕事－ |
| 2016年 | 5月 | 東海大学付属図書館 特別図書展 |

展示にあたって

近年、テレビや映画の世界では「時代劇」はあまり見られなくなってきました。それに代わりゲームやインターネットをきっかけに戦国武将や幕末志士などが取り上げられるようになってきました。また、最近の日本ブームの中、外国人が日本人以上に日本の歴史に興味を持つようになり、国内外で武士とその生き方が注目されています。

今回の展示では、本学附属図書館が所蔵する「武士」に関する資料を集めました。「平家物語」等の物語や絵巻、伊達政宗や明智光秀などの戦国武将の書簡など武士にまつわる資料をご紹介します。

多くの方々に興味を持っていただき、足を運んでいただけたら幸いです。



資料3より

< 武士の成り立ち >

1. 平家物語（へいけものがたり）

京都 平安城書林 元禄12年（1699年）刊 12巻6冊

鎌倉時代に成立した軍記物語。治承4年（1180年）から文治元年（1185年）にかけて展開された治承・寿永の内乱を中心に、平家の栄華と没落を描いている。琵琶法師によって語り継がれ、後の日本文学に多大な影響を及ぼしたと言われている。平家の滅亡を決定づけ、建礼門院や二位尼、安徳天皇の入水に至った壇ノ浦の戦いの段が特に有名である。

2. 源平盛衰記（げんぺいじょうすいき）

京都 額田正三郎 ほか 宝永4年（1707年）刊 48巻12冊

鎌倉時代後期から南北朝期に成立したとする説が有力視されている軍記物語。「平家物語」の異本のひとつとされ、読み物的要素が強く、後世の浄瑠璃や歌舞伎に大きな影響を与えた。展示の場面は、源頼朝の挙兵後、相模国石橋山で行われた石橋山合戦の様子である。石橋山は現在の小田原市。頼朝方で相模国大住郡の武将佐奈田与一義忠が、平家方の侯野景久を組み伏せ、首を取ろうとするが、血で鞆が固まってしまったため刀が抜けず、苦心する姿が描かれている。この後、平家方の武者によって義忠は逆に討たれることとなる。後年、錦絵の題材として盛んに取り上げられた義忠は、神奈川県平塚市真田地区を本拠地としており、現在、天徳寺があるあたりに義忠の居館があったとの説もある。「げんぺいせいすいき」とも読む。

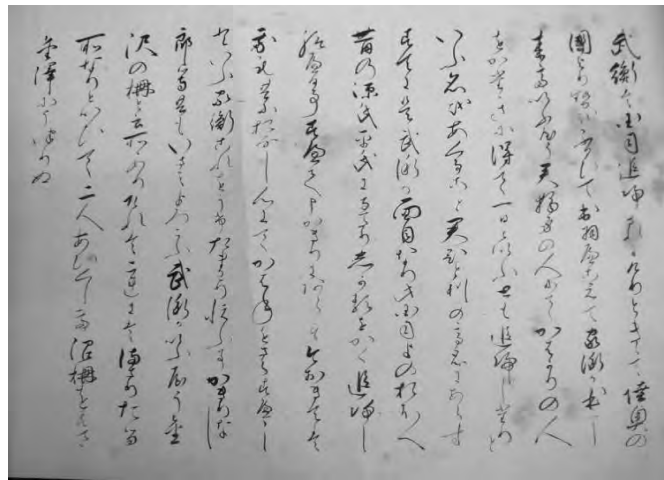
3. 後三年合戦絵巻（ごさんねんかつせんえまき）

書写地・書写者不明 延享3年（1746年）写 3軸

南北朝期に成立。源義家の活躍で知られる後三年合戦（1083-1087年）についての絵巻。この戦いは、陸奥・出羽両国で大きな勢力を振るっていた清原武則の孫、真衡（さねひら）が、養子成衡（しげひら）の婚礼祝いに参上した出羽国の一族、吉彦秀武（きみこのひでたけ）に礼を欠いた振る舞いをとったことが発端とされる。これをきっかけに発生した清原氏一族の内部抗争に源義家が介入し、大規模な戦乱に拡大したのである。

絵巻は真衡と対立した真衡の異母弟家衡と叔父武衡が金沢柵に籠城するところから始まり、金沢柵への兵糧攻めへとつづき、最後は金沢柵の落城と、捕えられた武衡の斬首、家衡の討死が描かれている。





資料3

4. 肥前国高来郡有馬浦原城(ひぜんのくにたかくぐんありまうらはらのじょう)

書写地・書写者不明 天保10年(1839年)写 1枚

寛永14年(1637年)に島原藩主による過酷な年貢の負担やキリスト教弾圧に反抗した農民やキリシタンが天草四郎(益田時貞)を中心に一揆(島原の乱)を起こした。この図は天草四郎が島原の原城に立てこもった様子や幕府側の陣の配置などが描かれており、寛永15年(1638年)2月28日に落城したことが記されている。

5. 十番切(じゅうばんぎり)

書写地・書写者不明 寛文・延宝(1661-1681年)頃写 2軸

鎌倉時代末期から室町時代前期にかけて成立した軍記物語「曾我物語」のうち、十番切の段を絵巻に仕立てたもの。十番切とは、曾我十郎祐成(そがじゅうろうすけなり)と弟の曾我五郎時致(そがごろうときむね)が、源頼朝配下の武者10人と戦った事をいう。曾我物語は、伊豆国の武将河津祐泰(かわづすけやす)の子である兄弟が、所領争いから父を殺害した工藤祐経(くどうすけつね)への仇討ちを誓い、17年後に富士の裾野で祐経を討ち果たす物語である。兄弟に降りかかる苦難や、兄祐成と大磯宿の遊女虎御前(とらごぜん)の悲恋が人々の共感を集め、日本三大仇討物語のひとつとして人気を博した。本資料「十番切」は、曾我物語の巻9から巻11までを題材とする幸若舞曲を絵入りの読み本としたもの。十番切を題材とする絵入り物語は非常に珍しい。



6. 寛永三年九月六日将軍様御参内御行列次第 (かんえいさんねんくがつむいかしょうぐんさまごさんだいごぎょうれつしだい)

製作地・製作者不明 江戸中期(1700年代)頃写 1軸

江戸幕府三代将軍徳川家光が、寛永3年(1626年)に後水尾天皇の二条城行幸を迎えるために、2度目の上洛をしたときの様子を記した卷子本。約21メートルに渡り描かれている。



7. 大名行列圖巻(だいみょうぎょうれつずかん)

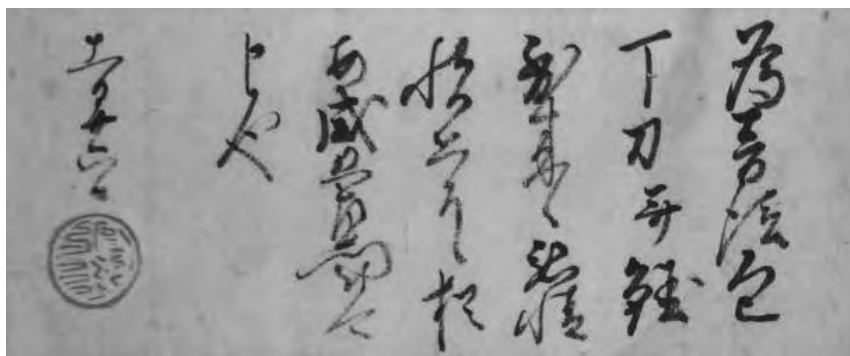
製作地・製作者不明 江戸中期(1700年代)頃写 3軸

陸奥国仙台藩士山岸家旧蔵、江戸中期以降に書写されたもの。製作当初は1巻であったものを裏打ち時に3巻に改装したもので、3巻合わせて21.5メートル以上になる。

8. 豊臣秀吉朱印状(とよとみひでよししゅいんじょう)

書写地不明 豊臣秀吉(15一一年)1通

本書状は包丁刀・鯉を献上されたことに対する豊臣秀吉の礼状であるが、宛所を欠くため発給先と、年代を推定することができない。本書状中の安威(あい)五左衛門尉は秀吉の取次人であり、実名は守佐(もりすけ)。当時の社会的風潮として、貴人に直接に接することは、礼を欠くこととされていた。そのため、取次人という貴人と諸人との仲介者が存在した。



9. 明智光秀書簡(あけちみつひでしょかん)

書写地不明 明智光秀 天正7年(1579年) 1通

本書状は発給年を欠くが、内容から考察すると、織田信長の丹波経略中のものである。しかも、9月頃に丹波国の国領城付近で戦闘があったのは、天正7年(1579年)のみである。したがって、本書状の発給年は、おそらく天正7年であると思われる。書状の大意は、国領城の落城、丹波天田・何鹿両郡の国衆の味方と残党の討伐を命じたものである。この丹波経略は天正3年(1575年)6月頃から同7年(1579年)中の間に行われ、途中、石山本願寺の蜂起などでしばしば中断された。

10. 千利休書簡(せんのりきゅうしょかん)

書写地不明 千利休 (15--年) 1通

本書状は梅花の贈答に対する礼状である。利休の手としては筆勢が弱く、宗易の署名の易の字も不鮮明なうえ短文であり、かつ花押も他の書状と比較すると異様であるため、真贋の判定は困難である。現段階では古写と考えられている。



11. 伊達政宗書簡(だてまさむねしょかん)

書写地不明 伊達政宗 元和3年(1617年) 1通

本書状は発給年を欠くが、発給人の政宗と宛名人柳生宗矩(やぎゅうむねのり)がそれぞれ陸奥守・但馬守に任命された期間は慶長13年(1608年)正月から寛永6年(1629年)2月までが該当する。この期間中で、政宗が2月25日に仙台に帰国し、5月に江戸に上ったのがわかるのは元和3年(1617年)のみである。したがって、この書状の発給年は元和3年であると推測される。

政宗の花押は鶴鶴(セキレイ)に似せたもので、その目に針で穴を開けているのが本物であると秀吉に伝え、都合の悪い文書を穴の開いていない偽物だとして、その場の難を逃れたとする逸話も残されている。



12. 細川忠興公書簡(ほそかわただおきこうしょかん)

書写地不明 細川忠興自筆(162-年) 1通

本書状は発給年を欠くが、細川忠興が「三斎」を称したのは隠居後の元和6年(1620年)以降の事であり、宛名人である家臣牧左馬之介(牧興相)が没したのが寛永6年(1629年)である。また元和8(1622年)正月に忠興(三斎)は江戸に新邸を造営しているので、本書状の発給年はこの頃ではないかと思われる。引越の際に太刀一腰・馬代銀一枚の祝儀を献上されたことに対する礼状であり、「tadauoki」のローマ字印が押印されている。



13. 直江兼続書簡(なおえかねつぐしょかん)

書写地不明 直江兼続 (1583-1619年)頃 1通

本書状は発給年を欠くが、兼続が山城守を称した天正11年(1583年)年から病没した元和5年(1619年)の間に発給されたものと思われる。山城国は現在の京都市南部。

14. 信長記(しんちょうき) / 大田和泉守牛一輯録 小瀬甫庵道喜重撰

出版地・出版者不明 寛永元年(1624年)刊 15巻8冊

織田信長の一代記。織田信長、豊臣秀吉、秀頼に仕えた安土桃山時代の武将太田牛一が書いた「信長公記」を改編したものである。小瀬甫庵(おぜほあん)は豊臣秀次などに仕えた安土桃山・江戸初期の儒医。展示資料には巻末に「自汗集」(小瀬甫庵の政道観を示す歌文集)あり。

15. 天正記(てんしょうき) / 太田和泉守記

京都 中村五兵衛 承応3年(1654年)刊 9巻9冊

豊臣秀吉の伝記。太田牛一著「太閤軍記」と大村由己著「天正記」が合冊されたもの。作者大村由己が秀吉の側近であったため、秀吉を美化して書く傾向が強いとされるが、同時代の人間が秀吉について記録したものとして貴重な資料である。

16. 名将言行録(めいしょうげんこうろく) / 岡谷繁実著

東京 山城屋佐兵衛 明治3年(1870年)刊 10巻10冊

上野国館林藩士である岡谷繁実による戦国から江戸時代中期までの名将192人の言行をまとめた書。館林藩は現在の群馬県館林地方。安政元年(1854年)繁実が数えて20歳の年に編述をはじめ、明治2年(1869年)に16年の歳月をかけて完成した。1252部もの引用文献に基づく彼らの逸話の数々が格調高い文章でつづられており、その内容はそれぞれの武将がいつどのような状況で語ったかを重視した臨場感溢れるものである。その後伊藤博文や大隈重信など大物政治家にも好んで読まれ、明治42年(1909年)には大隈重信の序文を添えた再版が出された。

17. 大坂御陣御備井首牒(おおさかごじんおそなえならびしゅちょう)

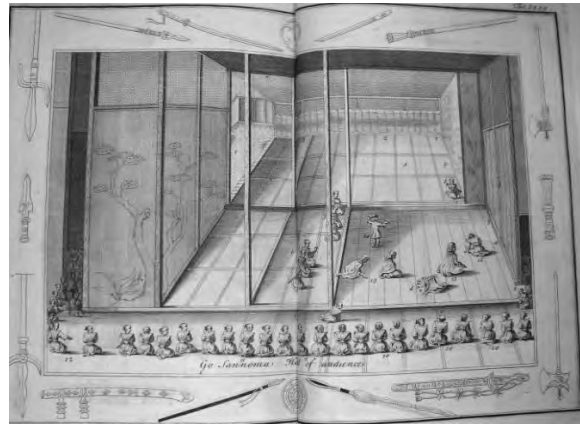
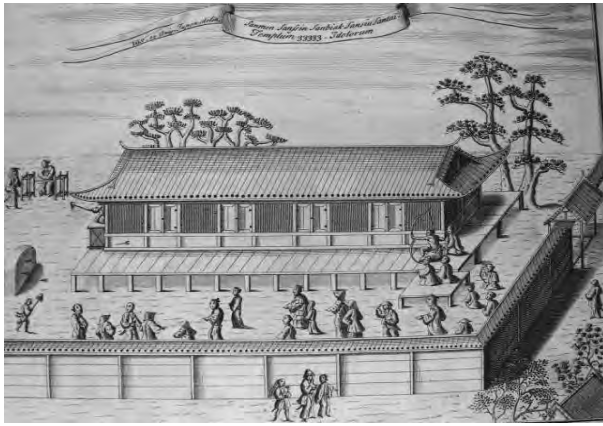
書写地・書写者不明 江戸初期(1600年代)頃写 28丁

大坂夏の陣における仙台藩の陣立てが書かれた書。仙台藩士の名とその装備が一覧になっており、他藩を圧倒する鉄砲の装備率が見てとれる。初代の仙台藩主伊達政宗は、大坂夏の陣には徳川軍について道明寺の戦いで豊臣軍の後藤基次を破った。この勝利が徳川軍の戦況を大きく優位に導き、結果として政宗は仙台藩の基礎を固めた。

18. The history of Japan / written in High-Dutch by Engelbertus Kämpfer (日本誌)

London Printed for the translator 1727 2 volumes

長崎出島のオランダ商館長付医師として赴任していたドイツ人ケンペルの主著。訳名は「日本誌」で知られる。元禄3年(1690年)から元禄5年(1692年)の滞在の間に2度江戸参府に随行した。日本の歴史・地理・宗教・動植物等を記述し、西欧人に日本を正しく紹介した最初の書物として知られる。



資料18

19. 風聞集(ふうぶんしゅう)

書写地不明 嘉永6年-明治元年(1853-1868年)頃写 5巻5冊

ペリー来航から戊辰戦争にいたる書簡・風聞・狂歌などをまとめた資料集。製作者は不明だが、収録資料から、紀州藩松坂領の人物であると推定される。

<武士の教養>

20. 武具図巻(ぶぐずかん)

書写地・書写者不明 江戸中期(1700年代)頃写 1軸

薄い和紙に32の武具名と、武具が精密に彩色され描かれている。



21. 武具短歌(ぶぐたんか) / 山鹿素行撰 加藤凉友考

江戸 須原屋茂兵衛 明和9年(1772年)刊 1舗

撰者の山鹿素行(やまがそこう)は江戸時代前期の兵学者、儒学者。元和8年(1622年)会津若松に生まれる。6歳の時に江戸に出て、9歳で林羅山に入門、朱子学を学び、15歳からは小幡景憲、北条氏長に兵学、武芸を学ぶ。「武教全書」などを著し、山鹿流兵学を完成。素行の教えは武家社会に大きな影響を与えた。忠臣蔵の大石内蔵助ら赤穂浪士、幕末の吉田松陰も山鹿流を学んでいる。本資料は上段に甲冑・刀・弓矢・銃・鞍の図解、下段に「武具短歌」を掲げた往来物。本文の「武具短歌」は、「夫、武具は、鎧・腹巻・太刀・刀・冑・八筋や星冑・・・」で始まり「・・・物見・忍に相詞、手柄の批判・武者詞、勝関・軍礼品々や、何も深き習あり」と結ぶ七五調の文章で、武具・馬具の名称や軍事関連の基本語彙を列挙したもの。

22. 武器百圖(ぶきにひやくず) / 小林祐猷輯画 山脇正準閲

出版地・出版者不明 嘉永元年(1848年)刊 1冊 16丁

校閲者の山脇正準は美濃国郡上藩士。美濃国郡上は現在の岐阜県郡上市八幡町。本資料は武器だけでなく、武家の生活用品などが200点紹介されている。名称と図が並んで掲載されており、名称には振り仮名が付けられている。切り取るとカルタとして遊ぶこともでき、武家の子どもたちの教育に用いられた。



23. 絵本写宝袋(えほんしゃほうぶくろ) / 橘有税画

大坂 渋川清右衛門 享保5年(1720年)刊 9巻10冊

江戸中期の狩野派の画家橘守国(橘有税)が、画法を伝えるために出版した絵本。武具や武者、動植物、源氏物語をはじめとする文学作品、中国の神仙など多岐に渡る画題が解説入りで紹介されている。

24. 論語(ろんご) / 孔子著

出版地・出版者不明 江戸後期(1800年代)頃刊 10巻4冊

儒教の祖として知られる孔子の言行・問答、門人の言葉などを集めた語録。「大学」「孟子」「中庸」とあわせて四書と呼ばれた。江戸時代には、武士の教養として学ばれていた。江戸幕府が旗本・御家人、およびその子弟の15歳以上の者に対して施行した学術試験「学問吟味」の中の教科のひとつでもある。「学問吟味」の第1回は寛政4年(1792年)9月に湯島の昌平坂学問所の庁堂で実施された。

25. 賦初何連歌(ふはつなにれんが) / 宗養 ほか詠

書写地・書写者不明 室町末期(1500年代)頃写 1軸

畿内・阿波国の戦国大名、三好長慶(みよしながよし)や連歌師として有名な里村紹巴(さとむらじょうは)、宗養(そうよう)、堺の商人で茶人の津田宗及(つだそうぎゅう)等が参加した連歌会。「連歌」とは、5・7・5の句(長句)と7・7の句(短句)を交互に複数の作者が詠み進めて一定の句数(普通は100句)で完結させるものである。この連歌も100句で成り立っている。中世、連歌は武士の教養として広まった。

26. 賦何船連歌(ふなにふねれんが) / 昌叱 ほか詠

書写地不明 心前 写 天正7年(1579年)写 1軸

鎌倉時代初期の公家で歌人の藤原定家筆の色紙(「来ぬ人をまつほの浦の夕風に焼くや藻塩の身も焦がれつつ」)を細川藤孝(幽斎)が得たことを祝うために里村紹巴宅で開かれた連歌会。細川藤孝・里村紹巴の他に里村紹巴の弟子の里村昌叱、心前の計4人が参加した。1人25句詠み、合計100句ある。細川藤孝は戦国時代から江戸時代初期にかけての武将。足利義晴、義輝、義昭に仕え、義昭追放後は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた。宗養に連歌を学び、多くの連歌会に参加、連歌師や公家・僧侶等と交流した。

27. 生害サセ様之事(しょうがいさせようのこと)

書写地・書写者不明 文久3年(1863年)写 1軸

生害とは自害のことで、本資料は武士の切腹の作法を記したもの。服装や介添え者の役目、刀を持つ位置や切る方向など詳しく書かれている。切腹は士分のみに許された名誉ある死刑で、江戸中期以降は切腹の作法は確立され、作法を身に付ける事は武士の教養とされていた。

28. 書礼法式(しょれいほうしき) / 小笠原大膳太夫長時, 右近太夫貞慶著

書写地・書写者不明 江戸後期(1800年代)頃写 1冊

小笠原長時は戦国時代の武将で信濃国守護。小笠原家は武家の有職故実を伝える一族として知られる。貞慶は長時の三男である。本資料は書状や高札等の様式を表したもの。書状は宛名人と発給者との間の身分の高下により、書き方などに違いがある。それら文書作成上の礼儀や法式を記載している。

29. Sketches of Japanese manners and customs / Silver, Jacob Mortimer Wier
(日本風俗習慣点描)

London Day and Son 1867 1 volume

本書はイギリス海兵隊の軍隊に同行して来日したシルバーが元治元年(1864年)から慶応元年(1865年)にかけて収集した日本の風俗習慣などの彩色図を原画として、ロンドンのDay & Son社が制作した27枚のクロモ・リトグラフを挿絵に使用し刊行された美しい書物である。その頃の冠婚葬祭や端午の節句、切腹、大名行列などの武士の姿が描かれている。

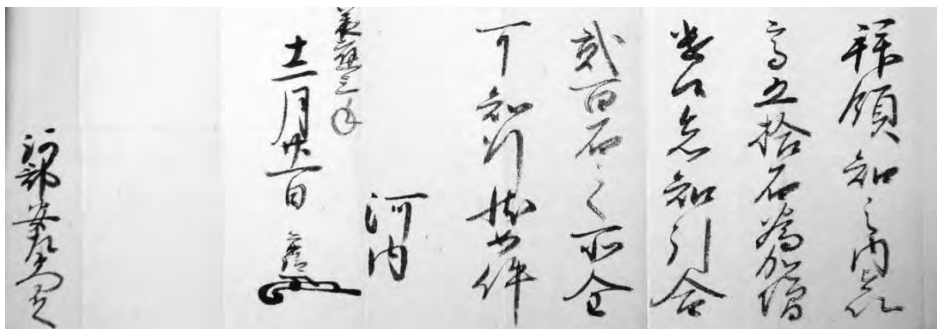


<武士の暮らし:下総国佐倉藩士田嶋伝左衛門関係史料を中心として>

30. 知行宛行状(ちぎょうあてがいじょう)

書写地・書写者不明 承応3年-嘉永6年(1654-1853年)写 10枚

近世における知行とは、主君が家臣に所領として土地を与え支配させることで、俸禄は知行地のかわりに米や金銭を支給することである。あてがわれた知行は、米の収穫量を示す石高として表された。本資料は加賀藩の家老をつとめた奥村家が、自らの家臣である河部(河邊)家にあてがった知行を証明するものである。100万石を越える大藩の加賀藩では、藩主前田家の家臣にあたる奥村宗家も1万7千石の知行を与えられていた。奥村宗家は藩祖前田利家に仕えた奥村永福の長男栄明に連なる家系で、永福の次男易英の家系も奥村内膳家として幕末まで1万石以上の知行を与えられている。河部家は前田家から見て陪臣(家臣の家臣)にあたり、宛行状は承応3年(1654年)から嘉永6年(1853年)にかけて10通が発給されている。知行は50石から100石の間を推移しており、文政5年(1822年)には河部安左衛門が隠居料として30石を付与された記録が残るなど、江戸期の武士の生活が端的に伺えるものとなっている。



31. 指物吹流；馬印吹流(さしものふきながし；うまじるしふきながし)

製作地・製作者・製作年不明 2流

下総国佐倉藩士であった田嶋家の馬駿(馬印)と指物。「武器書上帳」(展示番号32)には「定紋ニテ扇 総州佐倉家臣田嶋伝左衛門源重熙 但定紋文字共黒」「吹流白地絵 一心無尽像 但文字朱」と記載がある。どちらも合戦の際に武士が自らの所在を示すために使用したもので、長く泰平の世が続いた江戸時代にあっても、武士は格式を表すこれらの武具を所有していた。佐倉藩は、現在の千葉県佐倉市に存在した藩である。江戸前期には藩主の移動が激しかったが、延享3年(1746年)以降は、堀田氏の所領として定着した。堀田氏は「土佐日記」の作者紀貫之を輩出した紀氏に連なる一族とされ、幕末期、第5代藩主堀田正睦(ほったまさよし)は天保4年(1833年)以降に財政政策とともに学芸振興策をとまう藩政改革を推進した。

32. 武器書上帳(ぶきかきあげちょう)

書写地不明 田嶋傳左衛門 嘉永4年(1851年)写 15丁

佐倉藩士田嶋伝左衛門が所有する武具を目録とし、藩に届け出たもの。甲・面頬・胴などの具足類、展示番号31の「指物吹流；馬印吹流」を含む指物および馬具などの合戦用具が書き上げられているが、銃刀は記載されていないのが特徴。付属の挟み込み紙には、展示番号31の吹流しと馬印の寸法・色・塗りが図で解説されており、どちらも竿竹にくくりつけて使用されたことがわかる。

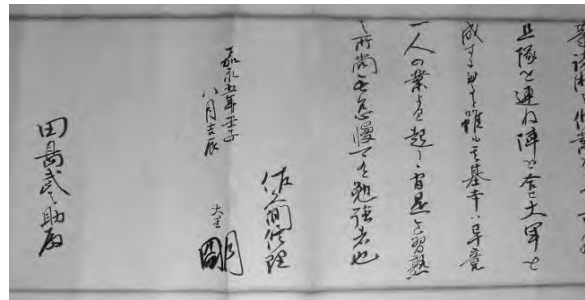
33. 西洋砲術真伝免許状(せいようほうじゅつしんでんめんきょじょう) / 佐久間修理書

書写地不明 佐久間修理自筆 嘉永5年(1852年)写 1軸

信濃国松代藩の思想家・砲術家であった佐久間象山(修理)が、佐倉藩士田嶋伝左衛門(武之助)に与えた砲術免許状。嘉永5年(1852年)発給。

佐倉藩主であった堀田氏は学問および武芸の振興に力を注いでいた。第5代藩主堀田正睦は従来の藩校温故堂を拡充改組し、天保6年(1835年)江戸に、翌年佐倉に成徳書院を設置した。改革では文武いずれかの免状を得たものは家禄の減禄を元に戻すとされたため、佐倉藩では文武が奨励され、藩校は盛況をみせた。現在の千葉県立佐倉高等学校はこの成徳書院が引き継がれたものである。

田嶋伝左衛門は成徳書院で「算術稽古両式演段術」「海上町見并測量伝達」の免状を取得、更に江戸深川にあった佐久間象山の塾に入門し、当時主流となりつつあった洋式砲術である高島流砲術を学んだ。本資料には伝左衛門が入塾一年足らずではあるが優秀な成績を収めたこと、砲術は算術や測量にも役立つことなどが書かれており、象山が門弟の経歴を詳細に把握していたことを伺わせる。



34. 帰除(きじょ)

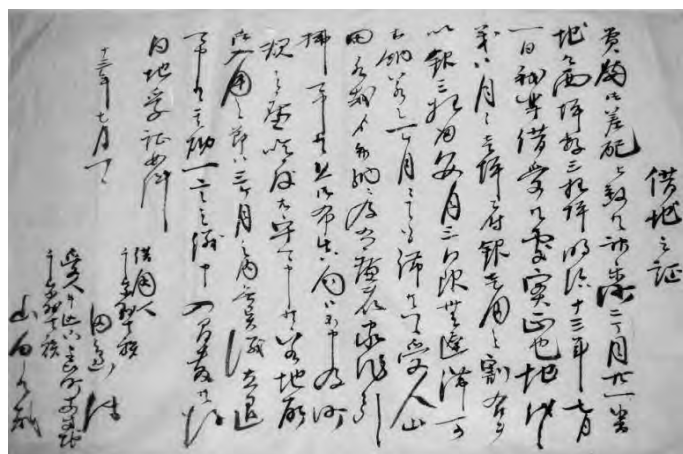
書写地・書写者不明 明治7年(1874年)写 8丁

帰除とは和算の計算法のひとつ、割り算のこと。田嶋伝左衛門は、天保7年(1836年)に設立された佐倉藩算学所の師範を勤めていた。江戸時代、武士は金銭の計算に携わることが多しむ傾向があったため、算術方は常に人手不足であり、身分や世襲によらない人材の登用が活発となり、中級・下級武士の出世の場となった。伝左衛門も90石の小禄ではあったが、藩校成徳書院の頭取に任ぜられるなど重用された。伝左衛門には伝(育太郎)という孫がおり、明治3年(1870年)に家督を相続していることから、本資料は伝のものであるとも推察される。

35. 借地之証(しゃくちのあかし) / 田島伝 書

千葉 田島伝 明治13年(1880年)写 1枚

田嶋伝左衛門の孫伝が明治13年(1880年)に東京牛込区神楽坂へ転籍した際の借地の証明書。牛込山吹町には佐倉藩の寄宿舎があった。伝は明治3年(1870年)に祖父伝左衛門から家督を相続、明治5年(1872年)には15歳で陸軍教導団へと入団している。転居前、幕末まで田嶋家が居住していた武家屋敷は現在でも佐倉市に保存されており、『旧武居家住宅』として一般公開されている。



36. 信州松代藩鎌原桐山家記(しんしゅうまつしろはんかんばらとうざんかき)

信濃 月岡万里嘉知 天保2年(1831年)写 37丁

信濃国松代藩士である鎌原桐山の家伝の写本。松代藩は現在の長野市の一部である。桐山は江戸時代後期の朱子学者でもあり、家老として真田幸弘・幸専・幸貫の3代の藩主に仕えた。また、佐久間象山の師で武芸に通じていた。この資料には真田家の家紋として知られている六連銭が記されている。

<物語の中の武士>

37. 絵本飛武呂山(えほんひむろやま) / 石川豊信画

東都 西村源六 宝暦(1751-1764年)頃刊 2巻2冊

江戸中期の浮世絵師、石川豊信が様々な武者の逸話を絵本仕立てで描いたもの。展示の場面は源頼朝の叔父にあたる武将、源為朝の伝承を元にしたもので、伊豆諸島の男の嶋(おのしま)に上陸した為朝の弓を、鬼の子孫を自称する島の住民がこぞって引くが、十人張の弓を引ける者は誰一人としていなかったという、為朝の豪腕を讃える場面である。

為朝は軍記物語「保元物語」の主人公で、幼い頃から武勇の誉れ高く、保元の乱では父為義に従って崇徳上皇に味方したものの、後白河天皇方となった兄義朝により上皇方は敗北、為朝は伊豆大島に流罪となった。その後勢力を蓄えた為朝は伊豆諸島を支配下に置き、狼藉をはたらいたため朝廷から追撃を受け、自害したとされる。滝沢馬琴作の読本「椿説弓張月」は、この時ひそかに落ち延びた為朝が琉球の祖となったという伝承を元にしたもので、江戸後期に庶民の間で大流行した。



38. 四天王始(してんのうはじまり)

江戸 鱗形屋孫兵衛 宝暦-明和(1751-1771年)頃刊 30丁

平安時代の、妖怪・化け物退治で有名な渡辺綱・坂田金時・卜部季武・薄井貞光ら、いわゆる源頼光四天王の話。内容は彼らが世に出るまでの物語。この本は黒本と呼ばれる草双紙のひとつ。江戸中期に多く刊行された。一般に黒本は歌舞伎・浄瑠璃の絵解き、化け物語、好色恋愛物などが多く、同じように大人向きの絵物語である黄表紙などと比べると絵の割合が多い。

39. 桶狭間続軍記(おけはざまぞくぐんき) / 笠亭仙果(2世)作 歌川芳春画

江戸 山口屋藤兵衛 慶応3年(1867年)刊 3巻3冊

展示資料40-42と同時期に出版され作者、画ともに同じである。江戸の戯作者、笠亭仙果(2世)(りゅうていせんか)作の草双紙。画は江戸の浅草に住み、美人画や武者絵を描く絵師、歌川芳春(うたがわよしはる)。外題に「桶狭間軍記」とあり。

織田信長に仕えていた前田犬千代(のちの前田利家)や、安土桃山時代の武将、蜂須賀小六(正勝)、佐久間盛政らが登場する。

40. 四国攻軍記(しこくぜめぐんき) / 笠亭仙果(2世)作 歌川芳春画

喰街(江戸) 山口屋藤兵衛 慶応3年(1867年)刊 3巻3冊

天正13年(1585年)に四国の長宗我部元親・信親と、豊臣秀吉の間で行われた合戦を題材とする草双紙。豊臣秀長・秀次、宇喜多秀家、蜂須賀正勝、黒田孝高、仙石秀久、小早川隆景らから成る10万を超える軍勢によって行われた四国攻めでは長宗我部親子の降伏という形で講和が成立した。



資料39

資料40

41. 岩倉攻軍記(いわくらぜめぐんき) / 笠亭仙果(2世)作 歌川芳春画

江戸 山口屋藤兵衛 慶応3年(1867年)刊 3巻3冊

織田信長が清洲城城主であった頃、反目していた織田信賢との岩倉城での戦いなどが書かれている。岩倉城は現在の愛知県岩倉市下本町で、永禄2年(1559年)に信長に破れ落城したとされる。



資料41

資料42

42. 日吉丸誕生記(ひよしまるたんじょうき) / 笠亭仙果(2世)作 歌川芳春画

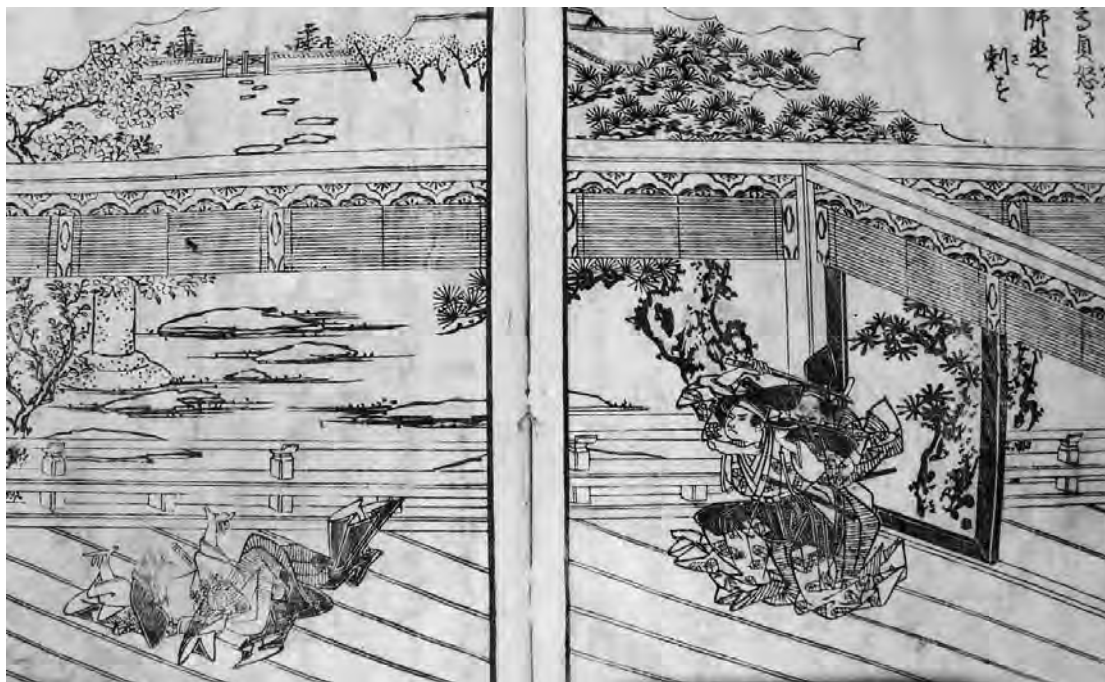
江戸 錦耕堂 慶応3年(1867年)刊 3巻3冊

豊臣秀吉の出生から織田信長に仕え頭角を現すまでを物語とし、草双紙に仕立てたもの。秀吉の母が日吉山王に子宝を祈願したところ日輪が胸の中に入る夢を見たことから後に生まれた秀吉の幼名が日吉丸となったとされる。

43. 絵本忠臣蔵(えほんちゅうしんぐら) / 速水春暁斎画

京都 菱屋孫兵衛 寛政12年-文化5年(1800-1808年)刊 10巻10冊

赤穂義士の仇討を絵本物にした読本。前編と後編からなり、前編は山東京伝の「忠臣水滸伝」に対抗して上方書肆が出版したもので、江戸後期の京都の読本作者である速水春暁斎(はやみしゅんぎょうさい)自作画の絵本物の初作である。後編は三都書肆連盟で出版されている。



44. 羅生門(らしょうもん)

書写地・書写者不明 江戸中期(1700年代)頃写 2軸

室町時代中期頃成立。源頼光と家臣の渡辺綱の武勇伝を語る御伽草子。羅生門に住んで通行人を悩ましている鬼の話聞いた綱は、確かめに出て膝丸という刀で鬼の右腕を切り落とすが、帰途に腕を奪い返される。この後、頼光が病にかかり、大和国宇多の森に住む鬼を退治すれば治るというので、再び綱が赴き、鬼の手を髭切という刀で切り落として持ち帰る。回復した頼光のもとに鬼が手を取り返しに来るが、頼光は髭切で打ち倒す。膝丸と髭切の2本の刀は鬼丸、鬼切と呼ばれ、源氏代々の家宝となった。



45. 大江山絵詞(おおえやまえことば)

書写地・書写者不明 江戸中期(1700年代)頃写 3軸

源頼光とその家臣である四天王が、酒呑童子(しゅてんどうじ)を退治する様を描いた絵巻で「酒呑童子」ともいわれる。頼光らが山伏姿に変装して丹波国、千丈が嶽の「鬼が島」に潜入、童子らに毒酒を飲ませて討ち果たし、誘拐された姫君たちを救出してめでたく都に帰るという物語。童子の住処を丹波の大江山から近江の伊吹山に移した伊吹山酒呑童子退治の物語(「伊吹童子」)も普及していった。巻末に「絵 狩野大炊助藤原元信」と書かれており、狩野派の流れをくむ人が書写したものと思われる。



参考文献

- Japan Knowledge Lib <http://japanknowledge.com/library/>
- ・国史大辞典(オンラインデータベース)
- ・日本大百科全書(オンラインデータベース)
- ・日本国語大辞典(オンラインデータベース)
- ・日本人名大辞典(オンラインデータベース)
- ・日本歴史地名大系(オンラインデータベース)
- ・デジタル大字泉(オンラインデータベース)
- 『後三年合戦絵詞』(日本絵巻大成15) 中央公論社 1977.11
- 『名将言行録』現代語訳 北小路健訳 講談社学術文庫 2013.6
- 『往来物解題辞典』解題編 往来物解題辞典 解題編 大空社 2001.3
- 『佐倉市史』 1-3巻 民俗編 佐倉市 1971
- 『佐倉藩紀氏雑録』(千葉県史料近世篇) 千葉県 1984.3
- 『佐倉藩紀氏雑録続集』(千葉県史料近世篇) 千葉県 1985.3
- 『連歌入門』広木一人著 三弥井書店 2010.11
- 『連歌辞典』広木一人編 東京堂出版 2010.3
- 『戦国武将と連歌師』綿拔豊昭著 平凡社 2014.11
- 『平塚と相模の城館』平塚市博物館 2012.3
- 『真田・北金目遺跡群』平塚市博物館 2013.7
- 「武士の嗜み、武士の威厳 その二-仙台藩士の行列」堀田幸義 (東北学院大学経済学論集177号)
- 「東海大学書簡シリーズ」曾根總雄「東海」71、72、75、105号 1985-1993

モノヲ
武士展

2016 年 11 月 14 日 発行

著 者—東海大学付属図書館

印 刷—事務部 業務管理課（印刷担当）

発行者—東海大学付属図書館

<http://www.time.u-tokai.ac.jp/>

〒259-1292 平塚市北金目四丁目 1 番 1 号

電話 0463-58-1211 (代)
